

ヨハネ「福音書」におけるギノースコーとオイダ (1)

川崎医療福祉大学 共通科目担当

佐々木 寛 治

(平成13年10月12日受理)

$\gamma\iota\nu\acute{\omega}\sigma\kappa\omega$ und $\acute{o}\iota\delta\alpha$ im Joh. „Evangelium“ (1)

Kanji SASAKI

*Beaufragte mit allgemeinbildenden Fächern,
Kawasaki Universität von Medizinischer Fürsorge
288 Matsushima, Kurashiki, Okayama, 701-0193, Japan
(Received on October 12, 2001)*

概 要

イエスのギノースコー：プロトタイプ——わたしはわたしのものたちを知っており、わたしのものたちはわたしを知っている、ちょうどわたしを父が知っておられわたしが父を知っているのと同様である。双方向の知、愛する者たちの存在論的共鳴。父の家における知

イエスのオイダ：プロトタイプ——わたしは父を知っている、わたしはこの方からの存在であり、この方がわたしを遣わされたからである。父から遣わされた子としての自己知。父の家への途上の知。キーワード：ヨハネ「福音書」、ギノースコー、オイダ、父の家での／への知。

Resümee

$\gamma\iota\nu\acute{\omega}\sigma\kappa\omega$ bei Jesu: der Prototyp——Ich kenne die Meinen, und die Meinen kennen mich, wie mich mein Vater kennt, und ich kenne den Vater.

Das Kennen gegeneinander und die ontologische Resonanz unter Liebenden.

Das Kennen zu HAUSE VATERS.

$\acute{o}\iota\delta\alpha$ bei Jesu: der Prototyp——Ich kenne den Vater; denn ich bin von ihm, und er hat mich gesandt.

Das Kennen seiner selbst als den vom-VATER-gesandten SOHN.

Das Kennen auf dem WEGE nach HAUSE VATERS. Key words: Joh. „Evangelium“, $\gamma\iota\nu\acute{\omega}\sigma\kappa\omega$, $\acute{o}\iota\delta\alpha$, Das Kennen zu / nach HAUSE VATERS.

1. 問題の所在

1.1 マルコ福音書の内容に沈潜しつつそのストーリーに巻き込まれていまイエス処刑場面にやってきた読者にとって、恐怖感と区別がつかないほどの驚愕に襲われる瞬間がありうる。激昂する寄る辺なき Hilflosigkeit に切り揉まれつつ読者が十字架上のイエスの絶叫を聞いて、〈この声はわたし自身の絶望の表現そのものだ!〉と直感したとしたら、その瞬間である。

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」

自分のうちの思いがそのままイエスの口から出ているのを直感することは戦慄するほどの驚きと呼び起こすに違いない。しかしそこにさらに恐怖が吹き出ることになるのは、無意識の底に隠れていた秘密に、つまりくイエスを見捨てたのは自分だ」という罪意識に、イエスの絶叫によって不可避的に気付かされてしまうときだ。しかも「預言者」イエスの処刑は、エゼキエルの身体預言とは異なる！神に向けて投げかけられたこの絶叫に現実の処罰がある（そして赦しも）。マルコ福音書の戦略がこの「見捨てる」の罪意識、抑うつ状態に集中していることは、ゼカリヤ13,7を引用して「すると、羊は散ってしまう」14,27と語られているところに露呈している。

愛する根源的な依存対象の喪失を前にしたこうした抑うつ状態のなかで初めて、事後的に、くイエスがどんな方だったのかが知られてくる。ここからこの読者のイエス告白が始まる¹。

ここで誤解があってはならない。「本当に、この人は神の子だった」と語ったあの百人隊長の言葉は、そのなかから初めて読者が何かを聞き出すべき内容を秘めた「告白」なのではない。彼の言葉をいわば呼び水にして告白すべき主体は、かえってテキストの読者そのものなのである。つまりテキストのあの場で読者一人ひとりがイエスのあの絶叫に震撼させられて、抑うつ状態の中でくイエスがどんな方だったのかに深く思いをめぐらせ、それぞれに自分の口で自分独自の体験のうえに、「本当に、この人は神の子だった」と告白せざるを得なくなるよう²、テキストはあらん限りの戦略を練ったのである。だからこのテキスト箇所での百人隊長の言葉は、一方で十字架の下の躁的防衛の色濃い嘲笑罵倒を反映し、他方で読者個々人の主体的な告白をいわば介添えしあるいは祝福する、極めてイローニッシュな言葉なのである。読者にしてこの告白が出なかったとすれば、テキストに震撼させられ自らの抑うつ状態にはいることのなかった読書として、失敗だったのである。

1.2 ところでヨハネ「福音書」を読む者にとって、この「福音書」を語り出した者がどのようにして全体対象としてのイエスに出会ったのかを問うことなしに、この「福音書」の「信じる」という術語の意味をつかむことは出来はしない。

名詞「信仰」を持たずに動詞「信じる」を格別多用するヨハネ「福音書」にあって、動詞「信じる」にどのような精神＝身体的な関係行為が内包されているのかを理解するための一環として、筆者はまず術語群「見る」と「聞く」を考察し、そして次に術語群「知る」を取り上げ、ある段階へと考察が到達できたと考えていた。

しかし筆者は、以前には考えもしなかった困難に現在出会っている。この「福音書」を縦断する強力な黙示的表象の連鎖を目撃する中から、「福音書」成立の時期についての深刻な問いかけが湧き上がってきたからである。それを断片的な疑問の羅列のかたちで記してみよう。

この「福音書」に「対象喪失の悲哀」がこれだけ濃厚なのはなぜか。ヨハネテキストの言語化におけるメンタ

¹ むしろ「福音書」というテキスト形式が、この「メシア放擲」の罪意識を抱え込んだ抑うつ状態という構造のなかで初めて、その昇華として、創出されたというべきであろう。マルコに特殊な位相での抑うつ状態が何であるか、それは何を意味しているかが、くマルコの福音書」を読むことの重大な意義のひとつである。

² このような自分一人ひとりの「直接見たこと、聞いたこと、感じ取ったこと」の上で告白体験を生きることこそ、ケーゼマンの認知理論は求めているのである。

ルスペース (M) は「地上のイエスの喪失」のうえにあるとしても、そのリアリティー (R) は「共同体中核部隊の喪失」にあるのではないのか。この意味で「告別説教」で別れ行く者は二重なのではないか。しかも重要なことは、「十字架以前のイエス」が(大貫氏の意味で)「回顧的に」語られているのと同様に、「十字架以前の中核部隊」が「回顧的に」語られているのではないか、つまりこのテキストが生産されたのは、短命のヨハネ共同体が崩壊した後なのではないか。こうして、亡国、神殿破壊のあとの、共同体再生を呼びかける、ある種の「黙示的預言者文学」という同位体が、「福音書文学」の同位体の奥に存在しているのではないか。この思いは第三ゼカリヤとヨハネ「福音書」との驚くべき共鳴関係を目撃した現在、ますます深まっている。

本小論は上記の疑問点から影響されない範囲で、術語群「知る」をめぐる考察の最初のささやかな一歩を呈示することにする。

2. 術語群「知る」の出現頻度

術語 <i>γινώσκω</i> 出現頻度	全57例	術語 <i>οἶδα</i> 出現頻度	全84例
A イエスを知る	31	A イエスを知る	37
A-1 イエスを(彼を)知る	*1(2)	A-1 イエスを(彼を)知る	(4)
A-2 イエスの(彼の)言葉, 声, 業を知る	(1)	A-2 イエスの(彼の)言葉, 声, 業を知る	(4)
A-3 イエスを(彼を)知る(文節目的語)	(9)	A-3 イエスを(彼を)知る(文節目的語)	(21)
A-4 イエスを(わたしを)知る	*1(5)	A-4 イエスを(わたしを)知る	(3)
A-5 イエスの(わたしの)言葉, 声, 業を知る	(3)	A-5 イエスの(わたしの)言葉, 声, 業を知る	(1)
A-6 イエスを(わたしを)知る(文節目的語)	(11)	A-6 イエスを(わたしを)知る(文節目的語)	(4)
B 神, 霊を知る	6	B 神, 霊を知る	9
B-1 神を知る	*3(4)	B-1 神を知る	(3)
B-2 神を知る(文節目的語)	*1(0)	B-2 神を知る(文節目的語)	*3(6)
B-3 霊を知る	(2)	B-3 霊を知る	(0)
C イエスが知る	13	C イエスが知る	22
C-1 イエスが(彼が)知る	(2)	C-1 イエスが(彼が)知る	(5)
C-2 イエスが(彼が, あなたが)知る(文節目的語)	(6)	C-2 イエスが(彼が, あなたが)知る(文節目的語)	*1(7)
C-3 イエスが(わたしが)知る	*1(4)	C-3 イエスが(わたしが)知る	(5)
C-4 イエスが(わたしが)知る(文節目的語)	(1)	C-4 イエスが(わたしが)知る(文節目的語)	*2(5)
D その他	7	D その他	16
注: *n()内の数のうち/ほかn例は他項と重複		注: *n()内の数のうち/ほかn例は他項と重複	

術語「信じる」、術語群「見る」、術語「聞く」の出現頻度についての同様な集計を参考にしつつ、術語群「知る」の集計上の分類項目は上のように設定することが適当であると筆者は考えた。なお「知る」の術語はギノースコーとオイダの二語について調べれば十分である。

普通の考えでは、「誰が何を知るのか」を調べれば、術語群「知る」のそれぞれの語彙素(以下シニフィアン)の特性が(もし有意な区別があるならば)浮き上がるだろうと思われる。後述するように、たしかに/ギノースコー/と/オイダ/の用法にはある鮮明な区別が見出されはする。しかしシニフィアン/ギノースコー/は、上記のような「誰が何を知るのか」という、日常的な主客関係への感覚そのものが破棄されるという点にこそ、その特徴があることが指摘されなければならないのである。

ところで上に便宜的に「主客関係」という言葉を使用したのが、筆者はイエスと人々との関係の取り結ばれ方そ

のものに視点を据えなければならないこと、しかもそれは、「人間関係論」的観点でさえなく、「対象関係論」的観点でなければならないと考えている。とはいえ、対象関係論はもともと「内的世界」の存在を前提にしたうえで、母子関係において、乳児にとり全体対象としての母親がどのように出現し、幼児と母親の「あいだ」にさらにどういう主体が空間を張っていくのかを考察するものである。この「母子間における対象形成とその現象」の考察を「イエスと信徒、敵対者」の間における「対象形成とその現象」の考察へと組み替える作業は、筆者においてまだその端緒が始まったに過ぎない。

本小論は上掲集計表のC項「イエスが知る」という時の、その「知る」の構造を全用例にわたって分析することに焦点を絞ることにする（各用例は原則として新共同訳）。

以下ではシニフィアン/ギノースコー/、/オイダ/の訳語はそれぞれ、
アミカケを施して「知る」、囲みの四角形を施して「知る」と記述する。

3. 『彼（あなた）イエスが知る』

3.1 『彼イエスがギノースコーする』——「ギノースコーするイエス」の対象である者たち

(全8例)

プロトタイプ：人間の心の中をくすべて見通されるイエスの知

2:24しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかった。それは、すべての人のことを知っておられ、

2:25人間についてだれからも証ししてもらう必要がなかったからである。イエスは、何が人間の心の中にあるかをよく知っておられたのである。

6:15イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでまた山に退かれた。

16:19イエスは、彼らが尋ねたがっているのを知って言われた。「『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』と、わたしが言ったことについて、論じ合っているのか。

21:17三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」イエスは言われた。「わたしの羊を飼いなさい。」

拡張例：人間達に対する、深い洞察が必ずしも表面化していない知

1:48ナタナエルが、「どうしてわたしを知っておられるのですか」と言うと、イエスは答えて、「わたしは、あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下にいるのを見た」と言われた。

5:6イエスは、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病気であることを知って、「良くなりたいか」と言われた。

4:1さて、イエスがヨハネよりも多くの弟子をつくり、洗礼を授けておられるということが、ファリサイ派の人々の耳に入った。イエスはそれを知ると、

3.2 『彼イエスがオイダする』——「オイダするイエス」の対象である者たち（全13例）

プロトタイプ：自分の道行きを〈すべて〉見通されるイエスの知

13:1 さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。13:3 イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、

18:4 イエスは御自分の身に起こることを何もかも知っておられた、進み出て、「だれを捜しているのか」と言われた。

19:28 この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、「渴く」と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した。

16:30 あなたが何でもご存じで、だれもお尋ねする必要のないことが、今、分かりました。これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます。」

6:6 こう言ったのはフィリポを試みるためであって、御自分では何をしようとしているか知っておられたのである。

拡張例1：自分の道行きに人間がどうかかわるか、裏切るか従うかの知

13:11 イエスは、御自分を裏切ろうとしている者がだれであるかを知っておられた。それで、「皆が清いわけではない」と言われたのである。

6:64 しかし、あなたがたのうちには信じない者たちもいる。」イエスは最初から、信じない者たちがだれであるか、また、御自分を裏切る者がだれであるかを知っておられたのである。

6:61 イエスは、弟子たちがこのことについてつぶやいているのに気づいて言われた。「あなたがたはこのことにつまずくのか。

21:15 食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と言われた。ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの小羊を飼いなさい」と言われた。

21:16 二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの羊の世話をしなさい」と言われた。

21:17 三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」イエスは言われた。「わたしの羊を飼いなさい。」

拡張例2：聖書（＝自分の道行きを書き記したもの）についての知

7:15 ユダヤ人たちが驚いて、「この人は、学問をしたわけでもないのに、どうして聖書をこんなによく知っているのだろう。」

3.3 『彼(あなた)イエスが知る』の用例総括

——「知るイエス」が地上の者たちと構築される対象関係の鮮明な対照

全用例がこれほど見事にプロトタイプとその拡張例の中に、——しかも両シニフィアンのスキーマの対照的姿を保存したままで——収まっているのは驚くべきことである。

『彼イエスがギノースコーされる』と語られるとき、イエスが〈御自身について何かを知られる〉というディスクールは決して成立しないのである³。これと対照的に『彼(あなた)イエスがオイダされる』と語られるとき、そのときは必ずイエスが〈御自身について何かを知られる〉という意味が発生している。しかも後者は時間的過渡的である点に著しいものがある(預言者文学的時間論)——これに反し前者には過渡の感覚は微塵も含まれていない。二つのシニフィアンの鮮明な使い分けは歴然としている。

さて、イエス本人ではなくて別人がイエスの知について、『彼(あなた)イエスがオイダされる』と語るときは、必ず「イエスは(今)、父の家への帰途にある⁴(広義には父の家から出て家に帰る途上にある)ことを意識されている」と理解し告げている。これはイエスの「内的世界」についての解釈であり、同時に、語る者の「内的世界」の呈示である。つまりイエスの「全体対象としての自己知」はそのまま鮮明に大貫氏のいわゆる「全時の人の子」(=語り手の内的対象としての全体対象)となっている。従ってこの「父の家からの現在の距離感」がイエスのオイダの尺度とみなされる。つまり、イエスが地上の人々と取り結ばれる対象関係は、「この人々がご自分の帰途の歩みに従うか逆らうか」という基準で測られる。遍歴的对象関係と規定することができる。

これに対し、『彼イエスがギノースコーされる』と語られるとき、「知られる」のは、地上の者たちの心の隠された奥底である。しかしこの「奥底」がご自分の遍歴の道行きに従うのか逆らうのかという基準は全く働いていない。このような視野からはまったく自由に、イエスは人々の心の深層に入り込まれるのである。あるいはむしろ、いわば「釈迦の手のひらに乗っている」かのように、人々は深く広大なイエス・キリストのなかに包含されているともいえよう。場所的対象関係と規定しよう。

4. 『わたしイエスが知る』

4.1 『わたしイエスがオイダする』

——イエスが「わたしがオイダする」として構築される対象関係 (全10例)

プロトタイプ: 自分の道行きの始点であり終点である天なる父についてのイエスの知

^{8:55}あなたたちはその方を知らないが、わたしは知っている。わたしがその方を知らないと言えば、あなたたちと同じくわたしも偽り者になる。しかし、わたしはその方を知っており、その言葉を守っている。

^{7:29}わたしはその方を知っている。わたしはその方のもとから来た者であり、その方がわたしをお遣わしになった

³ 21,17は唯一の例外にみえる。しかしそれは、ある人の「心の中」をイエスが知られたが、その「心の中」の内容がたまたまイエスへの愛だった、というのである。「その当人がイエス御自身を裏切るか愛しているかについての知」とは明確に異なる。

⁴ それは、ヨハネ共同体にとって、イエスが〈失われていく存在〉として極めて激情的パトス的に捉えられているということの反映なのである。ケーゼマンのあの深い心理学がこの面(イエスを共同体がどう受容しているかの抑うつ面)をまったく見落としていることは、われわれには不思議でならない。

のである。」

5:32 わたしについて証しをなさる方は別におられる。そして、その方がわたしについてなさる証しは真実であることを、わたしは知っている。

4:22 あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。

3:11 はっきり言うておく。わたしたちは知っていることを語り、見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。

拡張例1：自分の道行きを〈すべて〉見通されるイエスの知

8:14 イエスは答えて言われた。「たとえわたしが自分について証しをすとしても、その証しは真実である。自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、わたしは知っているからだ。しかし、あなたたちは、わたしがどこから来てどこへ行くのか、知らない。

拡張例2：自分の道行きに人間がどうかかわるかの知

8:37 あなたたちがアブラハムの子孫だということは、分かっている。だが、あなたたちはわたしを殺そうとしている。わたしの言葉を受け入れないからである。

13:18 わたしは、あなたがた皆について、こう言っているのではない。わたしは、どのような人々を選び出したか分かっている。しかし、『わたしのパンを食べている者が、わたしに逆らった』という聖書の言葉は実現しなければならない。

4.2 『わたしイエスがギノースコーする』

——イエスが「わたしがギノースコーする」として構築される対象関係(全5例)

プロトタイプ：父が知り、子が知り、イエスの者たちが知る[知ることの起源と、起源における知ることの交流]

10:14 わたしは良い羊飼いだ。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。

10:15 それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。

10:27 わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。

17:25 正しい父よ、世はあなたを知りませんが、わたしはあなたを知っており、この人々はあなたがわたしを遣わされたことを知っています。

拡張例：知ることの身体=精神的交流としての、愛することの知

5:42 しかし、あなたたちの内には神への愛がないことを、わたしは知っている。

4.3 『わたしイエスが知る』の用例総括

——イエスが「わたしが知る」として構築される対象関係についての暫定的総括

4.3.1 イエスがご自分から「わたしはオイダする」と言明されるとき、そのオイダの本来の客体は天なる父とその愛の掟であり、その下へとイエスは地上の人々を包摂される

イエス本人ではなくて別人がイエスの知について、『彼(あなた)イエスがオイダされる』と語るときは、「イエスは(今)、父の家への帰途にあると意識されている」としか窺われていない。あるいはイエスの、{父の家からの/への存在として、現在空間的に父からどれだけ隔たっているかの感覚}が焦点になっている。しかしいまやイエス本人が、『わたしイエスはオイダする』と語られるとき、その「知る」の根幹は「イエスの道の始点・終点としての父その方を知る」である。「内的対象」としての「父」とのイエスの対象関係が、すべての関係を尺度し整備する。イエスは父から派遣され父のもとへと帰還する方、地上の人々への父の愛を体現する方として、つまり、父により過程的遍歴にある者として、自らを掴まれる。そしてこの道の歩みに巻き込まれ、あるいはこの道を排除する者を見渡すという視野の中で、地上の者たちを知られるということ、この順序は絶対的である。

しかしこの不可逆の順序の決定的な始発点に、人間に近づこうとされる父子の愛の相手としての、このわたし(このわたしたち)の闇と罪がある。イエスの道はこの闇と罪があればこそであり、「父をオイダする」イエスの視線は、このわたしの闇と罪を照らし出している。わたしが自分の視線を、〈父なる神をオイダされる〉イエスの視線に重ねることができるなら、〈罪の奴隷、むしろ神殺害者としてのわたしを赦される父なる神を見た(ヘオーラカ)〉と告白⁵することができる。

この申し訳なさと感謝、赦された神殺害者のピブトーと神賛美—それをもたらす「霊の注ぎ」が、ヨハネ「福音書」から迸る〈生命の水〉(「穴からの水」、第三ゼカリヤの黙示的表象に関連するそれ)である。

4.3.2 イエスがご自分から「わたしはギノースコーする」と言明されるとき、そのギノースコーの始元は天なる父の家であり、そこでイエスは信じる者たちと聖なる交わりをもたれる

イエス本人ではなくて別人がイエスの知について、『彼イエスがギノースコーされる』と語るときは、「イエスは人々の心の奥底を知られる」としか窺われていない。しかしいまやイエス本人が、『わたしイエスはギノースコーする』と語られるとき、「生命の共鳴」としての〈双方向の知〉が出現する。子は父に見られて父を見、イエスの者たちは子から見られるから子を見ることができる。聖なる交わり、交流は「存在次元での共鳴」⁶として成立する。イエスが人の「心の中」を透見されるのは、そこに共鳴するものがあるかないかに反応する視線によって見られるからである。

イエスのギノースコーにおける双方向性は、上記統計的手法を支配するスキーマによってはこれを理解にもたらしことは決してできない。それはテキストの類像性、構造体の分析を必要とする。次頁のテキストからイエスのギノースコーが父のギノースコーと信じる者のギノースコーとの「推論的結合の媒辞」となっていること、そしてそれは「イエスの死」によって媒介されていること、父と子と信じる者の聖なる交流の「父の家」の基盤が「イエスの死」によって形成されていること、等々を読み取られたい(詳論は拙論『悪魔』)。

⁵ 『ヘオーラカメン』とは復活のイエスに出会ったこと、そのことによって赦す父を「見た」ことを告白する、ヨハネ共同体において様式化された術語である20,18,25, vgl. 1,34/1,18:5,37:6,46:8,38:14,7:14,9

⁶ それはヨハネ「福音書」の術語『聞く』の分析から見出されたことである。拙論『悪魔の λαλέω とイエスの λαλέω』参照。

